

審査の結果の要旨

氏名 ディマー クリスチャン

本論文は日本の近代以降の大都市における公共空間がいかにかに生成し、変転してきたかについて、開発者、行政、都市デザイナーなど各方面の関与者のそれぞれの立場から歴史的な分析を加え、近代日本の都市空間において公共性の概念がどのような位置にあるのかを明らかにしようとしたものである。研究を進めるにあたって、とりわけ私的に所有されているものの公共的に使用されている都市空間のあり方に着目し、そのデザイン手法を近代以降、もっとも最近の事例にまで踏み込んで調査分析し、その潮流を明らかにしている。

論文は研究の枠組みと研究の手法を述べた序章と5つの章から成る本論部分、そして結論を述べる6章によって構成されている。巻末に具体的な資料および参考文献を掲載している。

第1章は、序説であり、公共性の概念の検討を主として行っている。経済学および社会学的、政治学的な公と私の関係の概括的な考察ののち、物理的な公共空間の画定に関して、公的空間と私的空間の中間に私的に所有されている公的な空間の領域が存在することを示し、この領域を研究の主たる視点として日本の公共空間の特質を歴史のおよび現象的に明らかにしていくという手法を提示している。

第2章および第3章は、近代日本において公共空間がどのように生成し、発展してきたかを通時的に明らかにする章である。第2章においては、明治初期より1970年代まで、日本における公共空間は都市の機能を充足するための空間であったことを明らかにしている。たとえば「交通広場」という概念にそのことは象徴的に現れている。続く第3章においては、1970年代以降の公共空間に関する新しい概念の生成を取り上げ、地方公共団体による多様な公共的な空間の確保事例を明らかにしている。これらを通して、私企業による開発計画へのアンチテーゼとしての公共的空間づくりの民間運動を概観し、いわゆるまちづくりの動きの中における公共空間の位置を考察している。

第4章は、第3章とは対照的に、私的セクターによって供給される公共的空間について論じている。日本においては1960年代以来の都市計画上のインセンティブとして公開空地などの公共的空間が私的セクターによって設けられてきた。そうして生み出された公共的空間の性格や私的セクターの行動規範等の分析を続けている。最終的には近年、東京において実現した巨大プロジェクト（六本木ヒルズ、汐留シオサイト、ミッドタウン、丸の内

の再開発において私的セクターが作り出した公共的空間の具体的な特徴とその傾向を明らかにしている。

第4章が1970年代以降の動きを通時的に明らかにしているのに対して、第5章は、横浜市という単一の都市を事例として取り上げ、都市内の私的セクターが生み出した公共的空間の特徴を共時的に明らかにしている。特に公共的空間形成のための戦略的計画と地域レベルの総合的なマスタープランの重要性を、事例分析を通して明らかにしている。

結論を述べる第6章は、都市内の私的セクターが生み出した公共的空間の評価について、これを新しい公共空間の一類型として歓迎する初期の論調から、その商業主義や没総体性からこれらの公共的空間に疑問を呈する中期の議論を経て、公共的空間の「公共性」をより詳細かつ厳密に考察する近年の傾向までを総括している。

このような世界的な傾向の中で近年の日本の公共空間論議が、プロジェクトが生み出した具体的空間の評価に重点が置かれ、その「公共性」の検証が不足しているという現状を批判的に分析している。

以上、本論文は近代日本における公共空間の履歴と現況を具体的な事実を詳細に跡づけることによって明らかにし、特に私的セクターが生み出した公共的空間に着目し、その特質を明らかにしている。これらの作業を通して、日本の公共空間とそうした空間に関する認識の特質を明らかにすることに成功している。実証性に富んだ論述は今日の日本にとって有効な考察となっており、その有用性は非常に高いといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。